1925年パリ現代装飾美術・工芸美術国際博覧会の会場計画に関する考察

A STUDY ON THE SITE PLANNINGS FOR THE INTERNATIONAL EXPOSITION OF MODERN DECORATIVE AND INDUSTRIAL ARTS IN PARIS 1925

三田村 哲哉*, 小林 克弘**

Tetsuya MITAMURA and Katsuhiko KOBAYASHI

Through a study on the periodical transitions of the site plannings for the International Exposition of Modern Decorative and Industrial Arts in Paris 1925, the followings were made clear : 1) Louis bonnier made the principles and the solutions for problems of the site and the significances of this Exposition, and they gave a sense of unity to the site plan. 2) He gave orders to sites, scales, and forms of galleries and independent pavilions for the site plan.

Keywords : "International Exposition of Modern Decorative and Industrial Arts in Paris 1925",

Esplanade des Invalides, Grand Palais, Louis Bonnier, Charles Plumet, Site Planning

1925年パリ現代装飾美術・工芸美術国際博覧会、エスプラナード・デ・ザンヴァリッド、
グラン・パレ、ルイ・ボニエ、シャルル・プリュメ、会場計画

1. 序

筆者は、前稿において、現代装飾美術・工芸美術国際博覧会の敷地選考から決定に至る一連の検討過程に関する考察を行った。その中で、建築家ルイ・ボニエの敷地選定に対する一貫した活動と、敷地の抱える条件及び問題点を明らかにしたり。本稿は、その結果を受けて、本博覧会の会場の計画過程を明らかにするものである。本考察では、この計画過程をより明確に描き出すため、敷地の抱える条件及び問題点に対する対応だけではなく、本博覧会の開催意義の形成において生じた条件に対する対応に関する分析も行った。加えて、主要会場の1つであるエスプラナード・デ・ザンヴァリッドについては、独立館を中心により詳細な分析を行っている。

こうした本博覧会の会場計画に関する考察は、敷地選定に関する考察と同様に極めて乏しい²⁾。また、本考察は、会場の建築意匠学的視座からの分析だけではなく、その背景にある会場計画に対する条件等と、それらに対する対応に明確な考察の視点を向けている点においても、他と大きく異なるものである。さらに、各展示館が、この会場計画案を基に設計されたものであるため、本稿は、展示館の建築造形に関する考察に対しても意味あるものとなろう。

考察の対象とした会場計画案は、主に配置図、鳥瞰図及び、その案に関する報告書等からなる。また、これらの会場計画案は、当時を代

表する建築誌及び主要誌において随時発表された4案、芸術産業助成協会において発表された1案及び、本博覧会に関する公式記録に掲載された1案の計6案である³⁾。さらに、初めの3案に関しては、それぞれの案に対するルイ・ボニエの報告書と、展示会場の面積と展示館の平面外形または敷地形状に関する報告書についても考察を行った⁴⁾。加えて、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドに関する分析は、配置図の実施図面から各部の寸法を確認して、その精度を高めたものである⁵⁾。尚、この敷地に関しては、当時の測量図により、計画前の敷地細部の形状、高低差等についても確認を行っている⁶⁾。

2. 会場計画の条件―開催意義に関連した条件

1921年11月7日に、本博覧会の敷地は、植民地博覧会と協定を結ぶことによって、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドとグラン・パレを中心とした地域に決定した。しかし、この敷地には、本博覧会の会場計画案を描き出す際に、考慮すべき敷地に関連した条件と問題点があった⁷⁾。一方、1911年から本博覧会の開催意義に関する検討が継続的行われた。これに伴い、会場計画に直接影響を与える条件が生じていた。これらを整理すると次の3点にまとめることができる。

第1点目は、「フランスと諸外国との対置関係」である。これは、フランスの装飾美術と諸外国の装飾美術を比較しようとする認識が

* 東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻
博士課程・修士(工学)

** 東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Graduate School of Tokyo Metropolitan Univ., M. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Graduate School of Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

高まっていたことを表している⁹⁾。この認識が生じた理由は、フランスが諸外国から装飾美術の分野における立ち後れを取っていたことにさかのぼる。しかし、フランスは、本博覧会において、その遅れを克服し躍進していることを、諸外国の装飾美術と対置し比較することによって明らかにすることを目論み始めていた⁹⁾。

第2点目は、「展示物の『分類』」である。これは、博覧会でさまざまな展示物を整理し、有効に展示するために用途や素材によって仕分けを行う指標のことである¹⁰⁾。本博覧会は、展示品が装飾美術に限定されていることと、1900年パリ万国博覧会では、建築装飾に関する「組」が2しか規定されなかったため、本博覧会の「展示物の『分類』」を大きく発展させた¹¹⁾。具体的には、装飾美術に対しては「群」及び「組」による分類法へ発展し、最終的には5「群」、37「組」に及ぶ分類法が確立された¹²⁾。本博覧会においても同様に、この指標が会場を計画する際の大きな要因として影響を与えている。

第3点目は、「展示館の種類」である。本博覧会の展示館は、独立館、ギャラリー、グラン・パレの3種から構成され、各展示館の種類に基づいて分類される¹³⁾。一方、本博覧会の要求によって、諸外国及び諸地域の特徴を表した建築を発表するために独立館を用意することと、多くの展示物を陳列する展示空間を確保することが必要であった。そのため、前者には、独立館を建設する敷地を、後者には、各展示室を設置できるグラン・パレを用意することが求められた。さらに、ギャラリーは、より多くの展示空間の必要性と「植民地博覧会より委譲された際に課せられた条件」から考案されたものである¹⁴⁾。

3. 1922年3月案—独立館30棟案

ルイ・ボニエは、1921年12月16日に会場計画案の基本方針をまとめている¹⁵⁾。さらに2ヶ月後の1922年2月には、本博覧会の敷地及び展示会場のおおよその各面積の配分を行った¹⁶⁾。この中で、ルイ・ボニエは、「展示館の種類」に関連して、展示会場としてグラン・パレが利用できることと、「植民地博覧会より委譲された際に課せられた条件」によりギャラリーを建設することを考慮して、展示館の種類を独立館、ギャラリー、グラン・パレ及び、それ以外を屋外展示とレストランなどのサービス部門の4点に分類している。

その上で、ルイ・ボニエは、「フランスと諸外国との対置関係」を利用して、一つの方針を明らかにした。それは、全ての敷地の配分に際しては、フランス部門の展示面積と、外国部門の展示面積を平等に扱うことであり、これは面積計画においても明確に現れている¹⁷⁾。

さらに、ルイ・ボニエは、独立館、ギャラリー、グラン・パレの3つの展示会場にそれぞれの個性を明確に与えるため、「展示物の『分類』」を利用して異なる特徴を与えた。具体的には、それぞれの展示品の展示場所を区別することによって、これら3つの展示会場の特徴を明確に示そうとするものである¹⁸⁾。

以上のように、本博覧会の基本方針は、開催意義に関する検討において生じた3つの条件に沿ってまとめられていることがわかる。そして、この方針に沿って、独立館とギャラリーに関しても、より具体的な方針が明らかにされた。まず、独立館が、「植民地博覧会より委譲された際に課せられた条件」によって、エスブラナード・デ・ザンヴァリッド、クー・ラ・レンヌ等の敷地に建設されることを確認した上で、次の3点の基本方針が示されている。第1点目は、独立館には、350㎡から400㎡の敷地面積を与え、約30棟を計画す

図-1 1922年3月案 鳥瞰図

図-2 1922年3月案 配置図

ることである¹⁹⁾。第2点目は、独立館の建設をフランス国内並びに諸外国にも依頼するとともに、建築家だけではなく装飾美術のさまざまな分野の専門家や職人のグループが、これに参加することを要求している点である²⁰⁾。第3点目は、この独立館は、他の展示館とは異なる特徴を与えるために、「展示物の『分類』」に沿って、他の展示館とは異なる外観と内部空間が求められている点である²¹⁾。

これに対してギャラリーには、2点の基本方針を挙げている。第1点目は、「植民地博覧会より委譲された際に課せられた条件」によって、エスブラナード・デ・ザンヴァリッドに建設されることが決まっているギャラリーの短辺を16mとすることである²²⁾。第2点目は、ギャラリーの背景にあるアンヴァリッドを視覚的に引き立たせるために、4mの柱廊を設けることである。

ルイ・ボニエは、こうした基本方針を明確にした上で、1922年3月案を発表した(図-1、2)。この案の会場構成に関する特徴を整理すると次の5点にまとめることができる。第1点目は、エスブラナード・デ・ザンヴァリッドのアンヴァリッド側及び、グラン・パレとブティ・パレに挟まれたアレクサンドル3世通りの2カ所に大エントランスが設けられている点である²³⁾。第2点目は、独立館が、十分な間隔をとって庭園と交互に組み合わせて配置されている点である²⁴⁾。第3点目は、エスブラナード・デ・ザンヴァリッドのギャラリーが、両側のクァンコンスに沿うように軸線対称な位置にそれぞれ計画されている点である。第4点目は、「敷地の地理的及び周辺環境に伴う条件」への対応として、オルセー河岸及びクー・ラ・レンヌの路面電車の軌道部分を、歩道橋を設けることによって会場内の交通問題を解決しようとしている点である²⁵⁾。第5点目は、エスブラナード・デ・ザンヴァリッドに突き当たるサン・ドミニク通り、リュニヴェルシテ通りの正面には、それぞれ4棟のギャラリーが設けられている点である。

このように、1922年3月案では、「フランスと諸外国との対置関係」以外の敷地に関連した条件及び問題点と、開催意義に関連した条件に対する対応を明らかにしていることがわかる。それらを考慮した上で、会場をアンヴァリッドの軸性とセヌ河岸の地形を活かしたものとすることを、概念図に近い図面によって表している。

4. 1922年7月案—独立館60棟案

この会場計画案は、前案を基本として発展されたものである。具体的

に、本案は、前案に描かれた「植民地博覧会より委譲された際に課せられた条件」、「敷地の地理的及び周辺環境に伴う条件」、「展示物の『分類』」、「展示館の種類」に対する対応を中心に基本方針を踏襲したものである。ルイ・ボニエは、本案では、このような条件に対する対応の検討を続けるのではなく、本案の精度を向上させることによって前案を発展させている²⁹⁾。こうした見方ができる理由は、本案が、すべての展示館の数、平面外形または敷地外形及び、その面積算定を基に描かれているからである²⁷⁾。その面積精度の向上に見られる特徴は、次の3点にまとめることができる。

第1点目は、独立館に関してである。会場の各地域に応じた独立館が用意されているが、その地域ごとに独立館の短辺が同じ長さの平面形によって、平面外形または敷地外形が与えられている点である。例えば、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドに計画される独立館の平面の短辺には11mが与えられ、クー・ラ・レンヌにおいては、8mと12mが短辺の矩形または直径の円を平面外形または敷地外形とする独立館が計画された²⁸⁾。このように、独立館に対して平面の大きさとその形状によって、会場計画に一秩序を与えている。

第2点目は、ギャラリーが前回の基本方針をさらに発展させて具体化している点である。つまり、ギャラリーに対してグラン・ギャラリーとプティ・ギャラリーという大小関係が与えられただけではなく、すべてのギャラリーにそれぞれの平面外形及びその寸法が与えられた²⁹⁾。さらに、前案の基本方針で示された展示会場の特徴を明確化するという対応に沿って、グラン・パレとは異なる特徴ある展示を行うために、すべてのギャラリー内に1辺が6mの正方形の展示場所を合計175箇所設けるという計画を綿密に行っている³⁰⁾。

第3点目は、独立館と同様に、これに付設される庭園にも平面外形または敷地外形と、その面積算定が正確に行われている点である。これによって、その計画の精度を高めるとともに、独立館と庭園を一体として捉えた会場を正確に描こうとする意図が明確に読み取れる。このように、庭園が会場計画の中で重視されている理由は、本博覧会において庭園が、独立館と同様に装飾美術の視点からも重要なテーマとして扱われていたからである。さらに、こうした庭園は、適度な間隔を空けてそれぞれの独立館を配置することを促し、それらを魅力的に表現する効果を狙ったものでもある³¹⁾。

具体的に、本案と前案の相違点を明らかにし、本案の特徴を整理すると、以下の5点にまとめることができる(図-3)。第1点目は、アンヴァリッド側に設けられていた大エントランスを撤去し、図書館と会議場が、軸線対称に描かれている点である³²⁾。第2点目は、キャンコンスから多くの展示館が撤去され、ギャラリーによって囲まれた中央部分に独立館を計画し、この部分をエスプラナード・デ・ザンヴァリッドの中心会場とする意図が明確に表れている点である。第3点目は、第2点目に伴って、ギャラリーが、それぞれ2カ所のみエスプラナード・デ・ザンヴァリッドの中央部分からキャンコンスへ抜ける部分を残し、一体感のあるギャラリーへと変更された点である。加えて、図書館と会議場まで連続した回廊も設けた。第4点目は、路面電車の軌道部分をセヌ河岸側に迂回させ、さらに地下埋設化することによって、オルセー河岸及びクー・ラ・レンヌを会場として全面的に利用できるように改善した点である。これにより、前案において「敷地の地理的及び周辺環境に伴う条件」の解決のために計画された歩道橋も撤去された³³⁾。第5点目は、独立館の数が60棟に増加され、その

一方で、それぞれの独立館の平面の大きさは、約100㎡から250㎡程度に縮小されている点である。

本案は、前案で残った条件に対する対応を、会場計画案の中に具体的に描き出すのではなく、独立館の面積とその数等、計画自体の精度を向上させることによって、アンヴァリッドの軸性とセヌ河岸の地形を活かした会場を描き出すという前案の方針に沿った会場計画をより具体化することを試みている。

図-3 1922年7月案 配置図

5. 1922年11月案—独立館78棟案

本案は、この博覧会開催を招待国に通知するための報告書に掲載されたものである³⁴⁾。一方、ルイ・ボニエは、本案を作成するに先立って、会場計画に対する基本方針を再考した³⁵⁾。この基本方針は、会場内に建設する建築の会場全体に対する配分と均整という2つの視点からまとめ直したものである。

第1点目は、本博覧会全体の光景を重視している点である。具体的には、ルイ・ボニエは、アンヴァリッドの眺望を尊重するため、会場の樹木、庭園、水面等の余空間を十分に取ることを重視している³⁶⁾。これを基に、会場計画に関するより具体的な内容が決められた。まず、独立館に関しては、ギャラリーの両端に設けられた塔を除き、平屋建てとすることが決められた³⁷⁾。また、前案で行われた操作と同様に、独立館の平面形とその大きさを変更するとともに、その数を60棟から78棟に増加させている。特にエスプラナード・デ・ザンヴァリッドにおける独立館の数の増大が顕著である³⁸⁾。また、大きな変更を伴った地域は、クー・ラ・レンヌである。ここでは、中央車道の位置を変更することによって、セヌ川に沿って計画されている独立館をまとめて、セヌ川側に建設することが可能になった。このような操作によって、各独立館の平面の短辺の長さを中心として、平面外形または敷地外形が大きく変更されている。さらに、独立館の造形に対しては、単にすぎ石膏を塗っただけの仕上げが濫用されることを警戒し、装飾を際立たせるための簡素な外観を求めた。そして、この簡素な独立館を、彫刻、陶芸、モザイク等、さまざまな装飾美術の作品によって独立館に装うという、その設計手法に対する基本方針についても、会場計画と関連づけて示されている。

これに対して、ギャラリーには、前案の大小関係をより発展させて、グラン・ギャラリー内にも主従関係が設けられた。これにより、ギャラリーそれぞれの関係をより明確にしている(図-3、4)。具体的には、両端に塔を持つグラン・ギャラリーを主、キャンコンスのギャラリーを従という位置付けを行った³⁹⁾。そして、前案で平面が連続していたグラン・ギャラリーは、この位置付けによって、それぞれのギャラリーの突出した部分を切り離した。この変更により、ギャラリーは、軸性をより強調し、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドにより明確な秩序を与える骨格へと発展している。

一方、このような独立館とギャラリーのスケール操作によって、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドのセヌ川対岸から望むアンヴァリッ

ドに、塔を用いた都市スケールの造形を試みた(図-4、5)⁴⁰⁾。アレクサンドル3世橋の各端部に設けられた最も低い4棟の装飾塔に始まり、ブティックの端部に設けられた4棟の塔、そして、グラン・ギャラリーの端部に設けられた最も高い4棟の塔が、それぞれ軸線対称な位置に並び立つ⁴¹⁾。これらの塔は、グラン・パレ及びブティック・パレ側から徐々に高さの増すように計画され、鳥瞰を誇張した彫刻的な造形手法によって、アンヴァリッドの眺望を魅了しようとしていたのである。

第2点目は、展示のより優れた方法を求めている点である。この方法を具体化する上で重要な点は、1922年3月案の作成に先立ってまとめられた基本方針の中で、「フランスと諸外国との対置関係」と「展示物の『分類』」に対するそれぞれの対応を、会場計画案の中で具体的に表現することであった。そのため、ルイ・ボニエは、この2つの対応をより明確に見える形で会場の中に描き出している。まず、会場を描き出すにあたって、展示空間を構成するグラン・パレ、ギャラリー、独立館の3種の建築に基づいてまとめている。

ギャラリーは、その配置が軸性対称であるため展示空間が同じ広さとなるように、ファベール通り側のギャラリーをフランス部門に、コンスタンティヌ通り側のギャラリーを外国部門にそれぞれ割り当てた(図-4)⁴²⁾。グラン・パレも同様に、南側がフランス部門に、北側が外国部門に均等に割り当てられた。さらに、セヌ川を隔てて、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドにはフランスの独立館を、対岸のクー・ラ・レンヌには諸外国の独立館を建設することが計画された。このように、ルイ・ボニエは、アンヴァリッド、セヌ川及びグラン・パレの強い軸性を活かして、「フランスと諸外国との対置関係」を、会場の中に描き出そうと試みていたのである。

さらに、この関係をより明確に表現するために「展示物の『分類』」を用いて、展示の位置関係を厳密に決定した。特に、「群」を中心に行われている。具体的に、ギャラリーには、セヌ川側から第1群の「建築」と第2群の「家具」が、グラン・パレ1階には第2群の「家具」と第3群の「衣装・装身具」が、グラン・パレ2階には第4群の「劇場・街路・庭園芸術」と第5群の「教育」が割り当てられた⁴³⁾。

このように、本案は、前案同様、計画の精度をさらに向上させただけでなく、敷地に関連する条件及び問題点と、開催意義に関連した条件に対するすべての対応が、会場計画案の中に具体的に描かれていることがわかる。こうした点において、本案は、独立館のより詳細な設計を除き、会場に対する明確な方針と高い精度を備えている点において、招待国に通知できるまでの完成度を持ったものに改善されていると言える。

6. 1924年1月案—敷地を拡張した会場計画案

一方、1924年開催に向けた本博覧会の計画は遅れ、パリ市議会においても延期が議論された⁴⁴⁾。そして、1923年3月17日に、植民地博覧会の開催が予定されていた1925年に、本博覧会を開催することが合議された。これに伴って、植民地博覧会による本博覧会への敷地の委譲に関する協定も、1925年への延期を認めることとなる。

本博覧会の建設工事は、1924年3月26日に工事部長を勤める建築家シャルル・プリュメの指示により開始された⁴⁵⁾。したがって、本案は、ほぼ工事開始前の実施案に最も近いものであると考えられる。

本案と前案の最大の相違点は、敷地が拡張されたという点である(図-6)。具体的に拡張された敷地は、アンヴァリッド橋からアルマ

図-4 1922年11月案 配置図

図-5 1922年11月案 鳥瞰図

図-6 1924年1月案 配置図

橋までのアルベール1世庭園と、その対岸のオルセー河岸である。アルベール1世庭園は、パリ市が1925年7月まで、国立園芸協会と賃貸契約を交わした地域であるため、前案までは、本博覧会の敷地ではなかった地域である。本案では、アルベール1世庭園には、園芸、フランス村、植民地の3種をテーマとした展示館が計画された。その対岸のオルセー河岸には、前案においては、キャーンコンスに計画されていた輸送手段をテーマとした展示館等が配置されている。この拡張された敷地とクー・ラ・レンヌ及びオルセー河岸は、アンヴァリッド橋によって切り離され、さらに路面電車の軌道部分と交差する地域である。そのために、この2つの敷地は、当初の計画で取り上げられた歩道橋によって連絡することが計画された。

このように、拡張された部分以外のエスプラナード・デ・ザンヴァリッド等の会場においては、いくつかの細部に関する変更がなされているが、基本的な方針と会場の構成は、前案のものを踏襲している。

7. 1925年5月案一開催時の会場計画案

本博覧会は、1925年4月28日に開会された。この案は、会場全体の構成に関して、前案との相違点が1点しかない⁴⁶⁾。それは、当初計画していたものとは大きく異なる平面外形を持つ展示館が、多く計画されているという点である(図-6、7)⁴⁷⁾。具体的には、特に、セヌ河岸のクー・ラ・レンヌに計画された外国館と、アルベール1世庭園に計画された園芸、フランス村、植民地に関する展示館に多く見られる。諸外国の独立館は、1924年1月案において計画された独立館よりも規模の大きいものが林立し、展示館の間に余空間となる庭園がほとんど確保できないほどに密度高く計画されている。

一方、シャルル・ブリュメは、ルイ・ボニエの同意を得て、この会場計画において展示館の配置計画をまとめている。ここで、シャルル・ブリュメが、本案の中で最も重視しているエスプラナード・デ・ザンヴァリッドに対する考え方を整理すると、次の3点にまとめることができる⁴⁸⁾。第1点目は、この会場全体を統一感のある構成にすることである。第2点目は、セヌ川からアンヴァリッドに至るガリエニ通りの単調さを緩和することである。第3点目は、アンヴァリッド・ドームに至る眺望を尊重することである。

このように、ルイ・ボニエとシャルル・ブリュメのエスプラナード・デ・ザンヴァリッドに対する考え方は、1点を除きほぼすべての点が共通している。その相違点は、セヌ川からアンヴァリッドに至るガリエニ通りを中心としたエスプラナード・デ・ザンヴァリッドの構成に対するものである。それによって、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドの構成が、初期の案から次第に単調さが緩和され、独立館の配置が複雑な構成へと変更されたことは、ルイ・ボニエとは異なったシャルル・ブリュメの考え方によるものであると考えられる⁴⁹⁾。

8. エスプラナード・デ・ザンヴァリッドー独立館の検討過程

このように一連の会場計画に関する考察から、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドは、ギャラリーを会場の骨格と捉え、丹念に検討が繰り返されてきたことがわかる。その理由は、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドのギャラリーが、1922年3月案から修正を重ねるごとに、様々な条件を巧みに利用しながら、アンヴァリッドの軸性に対する強い意識を、より明確に表すものへと改善されてきたからである。加えて、ルイ・ボニエとシャルル・ブリュメの会場の捉

図-7 1925年5月案 配置図

図-8 1925年5月案 鳥瞰図

え方にも、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドを中心会場とする意図が現れている⁵⁰⁾。そこで、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドの計画過程をより明確に捉えるために、独立館を中心としてそれぞれの案の相違点を整理すると、以下3点にまとめることができる。

第1点目は、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドのグラン・ギャラリーに挟まれた位置に計画されている独立館の平面寸法の変更点についてである(図-2、3、4、6)。1922年3月案では、12棟の独立館の平面は、長辺及び短辺がそれぞれ約25m、15mの東西方向に長い長方形である⁵¹⁾。これに対して、1922年7月案では、主な10棟の独立館の平面は、長辺及び短辺がそれぞれ約15m、11mの南北方向に長い長方形に、その他の2棟の平面は、面積が88m²の長方形に変更されている⁵²⁾。しかし、1922年11月案では、主な8棟の独立館の平面は、一辺が15mの正方形に変更され、1924年1月案においても、この大きさが踏襲された。最終的に、主な10棟の独立館の平面は、一辺が16mの正方形を基本とした幾何学形に決定された⁵³⁾。このように、独立館の平面は、当初から一貫して幅が16mで計画されてきたギャラリーとその幅を統一することによってエスプラナード・デ・ザンヴァリッドの会場構成に一秩序を与えるように変更されている⁵⁴⁾。

第2点目は、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドのグラン・ギャラリーに挟まれた位置に計画されている独立館の平面形状の変更点に関してである。1922年3月案、1922年7月案において、独立館の平面は長方形であったが、1922年11月案以降の案では、独立館の平面は、正方形を基本とした十字形、その四隅を隅切りした八角形等によって与えられるようになる(図-2、3、4)。

第3点目は、プティ・ギャラリーに挟まれた敷地の独立館に関してである。1922年11月案からこの地域にも独立館を建設すること

が計画され始めた(図-4)⁵⁵⁾。この地域に与えられた独立館の平面は、長辺及び短辺がそれぞれ約12m、10mの東西方向に長い長方形を基本として与えられた。しかし、1924年1月案においてギャラリーとともに大きく変更される(図-6)。具体的には、ギャラリーの端部に設けられていた塔を撤去し、ギャラリーの幅を細くするという操作に伴い、その内側に計画されている独立館は、12棟に増加され、四隅に平面の大きい独立館を、その内側に平面の小さい独立館を幾何学的に配置している。この四隅に配置された独立館の平面は、一辺が20mの正方形を基本とした正八角形で、この会場に計画されている独立館の中でも最も規模が大きいものの1つである。さらに、塔を除いた他の展示館よりも高さのある独立館の計画が求められた。このような点から、この4つの独立館に、1922年11月案においてプティ・ギャラリーの両端に計画されていた4棟の塔による会場の造形的な役割を与えるという操作がなされたことが確認できる。

9. 結

このように、現代装飾美術・工芸美術国際博覧会の会場の計画過程を明らかにした。この考察から明らかになったことを整理すると、以下の3点にまとめることができる。

第1点目は、会場計画に最も大きな影響を与えた敷地の連続性に関するものである。ルイ・ボニエは、これに対して、アンヴァリッドからグラン・パレ及びプティ・パレに対する軸性と、それに直交するセヌ川に沿った方向性を、会場全体をまとめる最も基本的な敷地条件と認識している。具体的には、単にアンヴァリッドを会場の背景として尊重するという視点のみから軸性を重視しているわけではない。ルイ・ボニエは、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドのギャラリー、独立館及び、庭園による会場計画では、この軸性をより強調する方針で修正を続けた。また、アレクサンドル3世橋の装飾灯と各ギャラリーの塔による会場計画についても同様に、この軸性を強調し、垂直方向に広がりのある視覚的な演出を行っている。さらに、クー・ラ・レンヌ及びオルセー河岸では、路面電車の地下埋設化によって敷地の連続性を高めただけではなく、ルイ・ボニエは、セヌ川に沿った方向性を重視して、独立館及び庭園の平面及び配置を決定することによって、水平方向への広がりのある会場を計画した。このように、軸性と方向性は、会場の全体及び各地域にそれぞれのまとまりを与えている。

第2点目は、ギャラリー、独立館、庭園等による会場構成についてである。この会場は、ルイ・ボニエの基本方針に沿って計画されたものであるが、その基本方針は、敷地に関連する条件及び問題点と、開催意義に関連する条件を巧みに利用することによって、会場全体に配分と均整という2つの秩序を与えるために有効なものとして受け入れている。一方、本博覧会は、その開催意義において、展示館を含めたすべての分野の展示に対して、新時代の新しい造形を求めていたため、近代の新しい造形に対する期待と、新奇性のみを求めた造形に対する不安を重ねて持っていた⁵⁶⁾。そのため、会場全体に与えられた秩序は、このような未知の独立館の配置、規模及び、形態を制御するとともに、異なる新しい展示館、会場及び周辺都市との調和をもたらしことが期待されている。実現した会場では、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドのフランスの独立館は、計画通りの秩序と調和のある会場構成に基づいて、ゆとりのある庭園に囲まれたものであった。一方、クー・ラ・レンヌの諸外国の独立館では、

当初の計画とは異なる平面の独立館が、十分な余空間を取らずに計画された。この背景には、ルイ・ボニエが、フランスの独立館の配置、規模、形態を制御する意図が明確であるのに対して、諸外国の展示館に対しては、新造形を求める開催意義との矛盾から、明確な制御を示さなかったからであると考えられる。

第3点目は、ルイ・ボニエとシャルル・ブリュメの会場計画への取り組みに関してである。この会場計画において、両者が計画した部分を正確に分けて明確化することは、非常に困難である。しかし、敷地の選定から一貫して本博覧会に取り組んできたルイ・ボニエの敷地に関する理解は、会場の基本方針を打ち出すために有効なものであった。一方、会場の骨格が形成された1922年11月案以降、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドの会場に対する見解の相違から、明確に会場の構成が単調なものから複雑化される背景には、シャルル・ブリュメの影響があったと考えるのが自然であろう。

以上のように、ルイ・ボニエは、本博覧会の会場を一つの大きな方針に沿って、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドを中心に計画したことを明らかにした。これを受けて、主要展示館に関する考察は、稿を改めて述べたい。

註

- 1) 三田村哲哉、小林克弘、「1925年パリ現代装飾美術・工芸美術国際博覧会の敷地選定に関する考察」、日本建築学会計画系論文集、563号、2003年1月、pp.321-326
- 2) 吉田鋼市、「アール・デコ博とオーギュスト・ペレ」、建築史学、第2号、1984年4月。及び、三田村哲哉、小林克弘、中原まり、「パリにおける博覧会の変遷に関する研究—1855-1937年を対象とした配置計画の分析を中心として—」、日本建築学会計画系論文集、519号、1999年5月、pp.333-339。
- 3) 6つの会場計画案は、それぞれ発表された年月をその案の名称として表した。具体的にそれぞれの案を列挙すると、「1922年3月案」、「1922年7月案」、「1922年11月案」、「1924年1月案」、「1925年5月案」、「竣工図」となる。1925年5月案は、既往研究に多く掲載されているが、それ以外の会場計画案は、筆者が当時の建築誌等から選出したものである。また、1925年5月案は、竣工図と細部において異なる部分があり、建設開始後においても、計画の変更が繰り返されていたと考えられる。さらに、竣工図は、閉会後に発表された図面であるという性格から判断して、このような名称を与えた。「竣工図」は以下の図群に掲載されている。cf. Fernand David, Paul Léon, Louis Nicolle, Henri - Marcel Magne, Ministère du Commerce de L'Industrie des Poste et des Télégraphes, *Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels Modernes Paris 1925: Rapport Général: Section Administrative 4 Plans Construction & Aménagement des Bâtiments et des Jardins*, Larousse, Paris, 1931, Bibliothèque du Conservatoire National des Arts et Métiers
- 4) この展示館の面積等に関する報告書は、各地域への展示館の分配、展示会場の面積算定、展示館の平面形状、建設予算等の検討をまとめた面積表である。
- 5) 実施図面の配置図は、アンヴァリッドの正門の中心を基準として、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドの展示館の位置、平面外形及び敷地形状に関して、各部分に寸法を表したものである。cf. *Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels Modernes, Esplanade des Invalides et Couverture de la Gare, Plan Général, MINUTE 8861, DUPLICATA 9351* Archive de Paris, VR252, 縮尺1/200、大きさ:縦約282.5cm×横約138.5cm
- 6) 測量図は、実施図面同様に、アンヴァリッドの門の中心を基準として、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドの細部にわたる形状、位置、高低差が、20mグリッドを基準として描かれている。cf. *Direction des Services d'Architecture, 26 mars 1924, Archive de Paris 所蔵, VR251, 縮尺1/200*
- 7) 敷地に関連する条件と問題点は、「植民地博覧会より委譲された際に課せられた条件」、「敷地の地理的及び周辺環境に伴う条件」、「開催期間中の一般交通に関する問題」にまとめられる。三田村哲哉、小林克弘、Op.cit., 1), pp.321-326
- 8) このような認識は、1906年の下院議員クイバ氏の発言以降継続的に、下院議員ロブラン氏などのさまざまな人物によって言及され、より明確にかつ具体的なものへと発展していく。cf. *Documents parlementaires: annexes aux procès-verbaux des séances: projets et propositions de loi, exposés des motifs*

- et rapports/Chambre des deputes, Imprimerie du Journal officiel, Paris, 13 juillet 1906, pp.1545-1673, et 1 juillet 1912, pp.1436-1455
- 9) さらに、このような認識は「模倣禁止」という言葉に代表されるように、過去の様式や複製品を否定するような考え方に至るものである。cf. Roger Marx, "De l'Art Social et de la Nécessité d'en Assurer le Progrès par une Exposition", *Idées Modernes*, tome Premier, H. Dunod et E. Pinat Editeurs, Paris, janvier 1909, pp. 46-57
- 10) この「展示物の『分類』」は、1855年のパリ万国博覧会から伝統的に用いられてきた展示に関する基本指標である。cf. 鹿島茂、「絶景、パリ万国博覧会」、河出書房新社、東京、1992、pp.98-161
- 11) こうした背景には、1900年パリ万国博覧会閉会後、装飾美術に関する関心の高まりによって、1911年にロベール・ギレール (Robert Guilleré) が建築及び装飾美術の技術向上を主張したことが大きく影響している。
- 12) 吉田綱市、Op.cit., 2), pp.61-62
- 13) 本文中において、「展示館」は「独立館 (Pavillon isolé)」、「ギャラリー (Galleries)」、「グラン・パレ (Grand Palais)」を表す。
- 14) Signé: Fernand David, Angoulvant, "Convention relative aux emplacements à concéder éventuellement par l'Exposition coloniale à l'Exposition des arts décoratifs modernes-Convention additionnelle no.1", Paris, le 7 novembre 1921, Article Premier
- 15) Louis Bonnier, "Rapport à Monsieur le Commissaire Général", 16 décembre 1921, p.15, Institut Français d'Architecture-Centre d'archives d'architecture du XXe siècle, Fonds Louis Bonnier, "Exposition des Art Décoratifs de Paris 1925 Dossier de Préparation et Suivi", 35/70 (以下、上記のコレクションを Archive d'IFA Fonds L.B. と記す。)
- 16) Louis Bonnier, "Exposition Internationale des Arts Décoratifs Modernes", février 1922, Archive d'IFA Fonds L.B.
- 17) Louis Bonnier, Op.cit., 16)
- 18) 独立館、グラン・パレ、ギャラリーの中で違いが特に明確ではないのは、グラン・パレとギャラリーであった。そのため、ギャラリーは特別な構想を持った、執務室、寝室、食堂などの具体的な室に展示されることが求められた。Louis Bonnier, Op.cit., 15), pp.6-7
- 19) Louis Bonnier, Op.cit., 16)
- 20) Louis Bonnier, Op.cit., 15), p.2
- 21) フランスの独立館では、独立館自体も展示品であるという捉え方によって、地方芸術、近代住居、労働者住宅、田園住宅、学校、駅、郵便局などの具体的なテーマを挙げ、近代の装飾美術を決定する具体的な計画を求めている。
- 22) 幅16mという大きさは、ギャラリーを中廊下型を基本とした構成とする意図から生じたものである。具体的には、中央通路を4m、両側の展示会場を6mという幅の検討によるものである。この幅は、配置図の実施図面から、有効で幅16mであることが確認できる。Louis Bonnier, Op.cit., 15), p.4
- 23) F. Honoré, "L'Exposition Internationale des Arts Décoratifs", *L'Illustration*, 4 mars 1922, no. 4122, p.212
- 24) キャンコンスには、重要度が低く認識された展示館が計画され、緑地帯の中に建設されることから、庭園と組み合わせる計画するという意図はない。
- 25) この問題は、「開催期間中の一般交通に関する問題」の中でも重要な問題であり、歩道橋を設けるという案は、このほかの交通問題とともにパリ市議会においても議論されている。cf. "17-Modification des emplacements de l'Exposition des arts décoratifs et industriels modernes", *Bulletin municipal officiel de la ville de Paris*, Imprimerie municipale, Paris, mardi 10 juillet 1923, pp. 3008-3010
- 26) ルイ・ボニエは、会場計画案の作成に対する面積表及び、閉会後までの工程表を報告書にまとめている。cf. Louis Bonnier, "Exposition Internationale des Arts Décoratifs & Industriels Modernes en 1924", Direction des Services d'Architecture et des Travaux No.8, 9 juillet 1922, Archive d'IFA Fonds L.B.
- 27) 各展示館に与えられた面積が、敷地面積であるのか建築面積であるのかの判断は非常に難しい。しかし、最終的に建築外形と捉えて設計された展示館が多いことから与えられた面積は建築面積と捉え、図面においては建築外形であると判断した。面積表には、「Surfaces Constructibles」と記されている。
- 28) Louis Bonnier, Op.cit., 26), pp.6-7
- 29) 地下がアンヴァリッド地下鉄駅の敷地に計画されているものをプティ・ギャラリー (短辺10m)、その他のものをグラン・ギャラリー (短辺16m) とした。
- 30) Louis Bonnier, Op.cit., 26), pp.9-10
- 31) G.J., "L'Exposition des Arts Techniques de 1924 II-Le programme Architectural de M. Louis Bonnier", *Le Bulletin de la vie Artistique*, 1er juin 1922, p.251
- 32) 図書館と会議場は計画段階のもので、実現したのは図書館と劇場である。また、図書館と劇場の間の技能館は、計画段階では、ギャラリーとして扱われていた。
- 33) 歩道橋を架ける案がパリ市議会等でも反対された理由は、眺望を損なうことと、歩道橋のみによる交通に難しさが残るからである。また、路面電車の地下埋設化は、1900年パリ万国博覧会の時と同じ方法であり参考にされている。cf. 25)
- 34) 日本に送付されたもの:「各国博覧会関係雑件、別冊万国装飾美術工芸博覧会第一巻 自大正十二年六月、至大正一三年十二月」、外務省外交資料館
- 35) Louis Bonnier, rapport, 1922?, Archive d'IFA Fonds L.B.
- 36) 会場内の樹木の伐採は禁止されていた。G.J., Op.cit., 31), pp.250-251
- 37) Louis Bonnier, Op.cit., 35), p.2
- 38) 本案に関しても前案と同様に、面積計画が面積表によって表されている。cf. Louis Bonnier, "Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels Modernes", Archive d'IFA, Fonds L.B.
- 39) Louis Bonnier, Op.cit., 35), p.2
- 40) ルイ・ボニエの高さへの配慮が述べられている。cf. G.J., 31), pp.252
- 41) 前案において、アンヴァリッド地下鉄駅の上に建つ「プティ・ギャラリー」は、「ブティック」に変更されている。
- 42) "Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels Modernes", M DCCCC XXII, Imprimerie Nationale, Paris, 1923, pp.3-7, Archive d'IFA Fonds L.B.
- 43) Op.cit., 42), pp.13-24
- 44) Op.cit., 25), "Modification de la date d'ouverture de l'Exposition des arts décoratifs et industriels modernes", samedi 17 mars 1923, p.1346
- 45) "Inauguration des Travaux de l'Exposition des Arts Décoratifs", *La Construction Moderne*, Paris, 6 avril 1924, p.321
- 46) 本案の配置図は、以下の図書にも掲載されている。Michel Roux-Spitz, *Batiments et Jardins-Exposition des Arts Décoratifs Paris 1925*, Edition Arbert Lévy, Paris, 1925 (ミッシェル・ルゥー・スピッツ編、鈴木博之訳、「アール・デコの建築と庭園」、学習研究社、1985)
- 47) 竣工図からも明確に確認することができる。cf. 3)
- 48) Michel Roux-Spitz, Op.cit. 46), p.15 (ミッシェル・ルゥー・スピッツ編、鈴木博之訳、Op.cit. 46), p.15)
- 49) シャルル・ブリュメは、こうした単調さを緩和するために、4本の塔に期待したが、それはアメリカ旅行における摩天楼の経験によるものである。
- 50) 本来、「フランスと諸外国との対置関係」からこの両者を対等に扱わなければならないが、最も広大な敷地であり統一感のある会場を構成できたという点においてエスプラナード・デ・ザンヴァリッドを中心会場として捉える見方もあった。Michel Roux-Spitz, Op.cit. 46), pp.15-16 (ミッシェル・ルゥー・スピッツ編、鈴木博之訳、Op.cit. 46), pp.15-16)
- 51) 長方形の辺の長さは、面積表の面積と比べながら配置図から実測したものである。
- 52) Louis Bonnier, Op.cit. 35), p.3
- 53) アンヴァリッド地下鉄駅側の2棟の塔に隣接する独立館のみ幅が異なる。
- 54) 厳密には、独立館は平面外形の一辺が16mの正方形で与えられているのに対して、ギャラリーは建物の有効寸法の内寸で16mを取っている。cf. 5)
- 55) この敷地は、アンヴァリッド地下鉄駅の上部であり、建築の建設及び庭園や植樹に関しても制約のある地域である。したがって、当初から、この部分に独立館を積極的に計画するとは考えにくい。
- 56) Op.cit. 42), pp.3-4, 25
- 図版出典 (全図版に施設名等を筆者加筆。図-3は天地逆に掲載した。)
- 図-1 *L'Illustration*, 4 mars 1922, no. 4122, p.212
- 図-2 *L'Illustration*, 4 mars 1922, no. 4122, p.213
- 図-3 Discours de M. le Sénateur Fernand David, *Réunion de 7 juillet 1922*, Société d'Encouragement à l'Art et à l'Industrie, Imprimerie Henri Diéval, Paris
- 図-4 *Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels Modernes*, M DCCCC XXII, Imprimerie Nationale, Paris, 1923
- 図-5 *L'Illustration*, 18 novembre 1922, no. 4159, p.484
- 図-6 "Exposition des Arts Décoratifs en 1925 Plan d'ensemble", *La Construction Moderne*, Paris, 13 janvier 1924, no.15, p.174
- 図-7 "Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels Modernes 1925 Plan d'ensemble", *La Construction Moderne*, 3 mai 1925, no.31 pl.122
- 図-8 Paul Géraudy, "L'Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels Modernes - L'Architecture Vivante", *L'Illustration*, 25 avril 1925, no.4286

(2002年11月10日原稿受理、2003年2月19日採用決定)